

学 位 請 求 論 文 要 旨

村上春樹における〈他者〉
-中国表象と女性表象を中心に

平成 30 年 1 月

城西国際大学大学院 人文科学研究科
比較文化専攻

王 寒笑

村上春樹は海外の読者にいかなる感動をもたらしたかは、おそらく日本の評論家にとって一つの謎であろう。先駆的に他者表象を描いたからと、筆者はこの論文で答えようとしている。

この論文は「村上春樹における〈他者〉——中国表象と女性表象を中心に」をテーマに、フェミニズム文学批評やポストコロニアリズム、日中比較文学論によって、中国と女性をはじめとする〈他者〉という視点から、新しい村上春樹論を展開・提示するものである。

他者とは、「私」と関係を結ぶ相手のことを意味する。他者とアイデンティティを共有することで戦争や暴力を防ぐ効き目があることが近年指摘されている。アマルディア・センは『アイデンティティと暴力——運命は幻想である』で、アイデンティティには内的な包括性と外的な暴力性を統一していると論じた。国や宗教の間に戦争が起こった時、人は単一のアイデンティティで自分か他者を判断し、他者を人間視しなくなり簡単に暴力を加え、暴力の企画者は単一のアイデンティティを強調し人為的に他者を作り上げテロリストを生産するという。単一化されたアイデンティティによる暴力に対抗するため、アマルティア・センは複合的なアイデンティティに基づいたグローバルな民主主義を提起した。グローバルなアイデンティティの土台の一つは他者のアイデンティティへの注目である。他者の主体性への無視は暴力を醸成するが、逆に他者への注目は世界を平和に導くという。文学は身近に他者と邂逅できる無限な空間を作りあげ、批評により他者の発見を顕在化することができるからである。その対象として作家の一人は村上春樹をとりあげ、本論文で村上春樹を通して文学の中で他者の主体性に注目していきたい。

村上春樹は「高くて硬い壁と、壁にぶつかって割れてしまう卵があるときには、私は常に卵の側に立つ」とエルサレム賞受賞式典スピーチで発言したことはよく知られている。同じスピーチの続き「私が小説を書く理由は、たった一つしかありません。それは個が持つ魂の尊厳を表に引き上げ、そこに光を当てることです。小説における物語の目的は警鐘を鳴らすことにあります。(略) 小説家の仕事は、物語を書くことによって、一人ひとりがそれぞれに持つ魂の特性を明らかにしようとすることに他ならないと、私は信じている」ことから、「卵」は「個の持つ魂」のメタファーとなっている。今まで光のあたらない魂の特性を書くのは村上春樹の小説における追求だと言えるだろう。光のあたらない魂というのは、何よりも今まで十分注目されない他者であり、このような他者を表象することこそ文学の役割であり、村上はその自信の文学の根拠をおいている。今日まで村上春樹がこの文学理念を追求してきたと言える。彼は国籍・性別・宗教・年齢を問わず他者を書き続けてきた。この意味で村上春樹を論じる時他者視点が不可欠である。

他者表象の視点から村上春樹作品についての研究はジェイ・ルービンや林少華など翻訳者たちをはじめ日本の内外から行われてきた。ジェイ・ルービンの研究は『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』にまとめ、村上春樹が近代日本における戦争や暴力への注目を指摘した。林少華は村上春樹と中国・アジアと暴力について著書と論文を中国で発表し、日本語に翻訳された部分もある。日本の外部に村上春樹における他者表象の研究成果が見られた。

日本において、国際交流基金の企画に基づき『世界は村上春樹をどう読むか』という一冊にまとめられている。国籍を超え、変動期に入った国々の若者が春樹に心を惹かれたことが分かった。藤井省三は『村上春樹のなかの中国』で、中国での春樹の翻訳研究と受容研究の他、春樹の中で中国が歴史と戦争の記憶の象徴のように論じた。しかし他者の視点からみると在日中国人「ジェイ」の解釈などの点で別の論点が出るのではないかと考えられる。中国出身の研究者王海藍は『村上春樹と中国』でアンケートにより村上春樹の中国での受容と中国での研究状況を詳しく論じた。その他、村上春樹のなかの中国を指摘し、特に村上春樹のなかの中国人は中国大陸部に生きる人間ではなく華僑であることを指摘した。しかし、村上春樹の中国感については王海藍も述べたように論の中心ではなかったし、村上春樹文学における「中国人」の存在は単なる「趣味」「関心」のように思うのは賛成しきれないところがある。

また、女性を性的相手として描写することや、簡単に女性を消失させることから、村上春樹をフェミニズムの視点から批判する声も多かった。上野千鶴子・小倉千加子・富岡多恵子は『男流文学論』で『ノルウェイの森』（講談社 1987）に登場した女性にリアリティがなく、他者化された存在のように批判した。渡辺みえ子は『語り得ぬもの 村上春樹の女性表象』で、村上春樹の『ノルウェイの森』と『スプートニクの恋人』（講談社 1999）を扱い、レズビアンという「異性愛中心社会の他者」を論じることによって、村上春樹がレズビアン行為を行った女性を「不可解な闇」を担わせ、他者化していたことを明らかにしている。村上春樹の二〇一七年の新作『騎士団長殺し』に対して、大森望と豊崎由美は対談で村上春樹が女性を死なせたり消えさせたりして、女性の描きかたは好き勝手に都合主義であることを指摘した。そのほか、村上春樹は女性を他者化する点においては反対意見を取り入れない「確信犯」であるように批判した。

これらの研究からわかってきたのは、村上春樹は女性を性的相手として表象し、物語の中で他者化して整えないまま死なせるといった問題である。しかし、具体的に村上春樹はどのように他者を表象してきたか、そのような描写は村上春樹が文学理念を具現化する上でどのような役割を果たしたかはまだ追求する余地がある。また、女性表象において村上春樹の今までの突破点も無視されているままである。

本論は中国人留学生という論者の個人経歴から出発しながら、中国人表象と女性表象を中心に、村上春樹の描いた他者表象というテーマについて、他者から村上春樹の作品を理解する新しい角度を提供しようと思う。そのため、本論は「村上春樹における中国表象」と「村上春樹における女性表象」という二部に分けて論じていく。

まずは村上春樹における中国表象ある。

第一章で『羊をめぐる冒険』のなかの「羊」の表象を先行研究に踏まえながら解釈する上、中国のイメージが「羊」の表象に含まれていることを明らかにしたい。『羊をめぐる冒険』についての多様に研究されてきて、今までの「羊」表象についての解釈をまとめたい。また、「羊」の背後に中国が隠されたことを指摘し、中国が他の集団のように村上春樹の作

品において矮小化され、個人の自由の妨げのように描かれたことを批判したい。この章はテキストに基づき、夏目漱石『三四郎』を連想しながら羊の意味と羊のふるさとという二部に分けて展開している。

第二章で初期三部作において登場した「ジェイ」という中国人の脇役を分析していきたい。「ジェイ」は今までの研究であまり論じられていなかったが、三部作の三作目『羊をめぐる冒険』の最後に「僕」は「ジェイ」を思い出し、彼を寛容的で暖かい存在だと思うシーンがある。それは「ジェイ」が日本と中国・アメリカとアジアの戦争史に挟まれた経験があり、戦争から生き残ったジェイは多国の人間に理解と共感を持ち始め、国籍を超えて「僕」と鼠の家族になったからではないかと思う。移動のなか、ジェイは複合したアイデンティティの代表になっているのではないかと考えられる。

第三章で村上春樹の初短編小説『中国行きのスロウ・ボート』において登場した中国人を論じたい。その中国人は大陸部に生活する中国人ではなくて在日中国人であることはすでに指摘されていた。それに基づき、この章は今まで論じられなかった『中国行きのスロウ・ボート』で登場した中国人小学校の先生、中国人女子大生、高校時代の中国人クラスメート三人の中国人の心理状態を分析したい。20世紀80年代の始め、村上春樹は日本を生きる在日中国人の生き方とアイデンティティを先見的に描写したことを評価したい。

また村上春樹における女性表象である。

第四章で『1Q84』に登場した青豆という登場人物を中心に論じていく。青豆は受動的なヒーローと違い、積極的に行動を取るヒロインである。彼女は偏狭な宗教と家族から脱出し、親友の復讐のために殺人まで行った。また家庭内暴力と戦うため暴力を振るい、宗教のリーダーと最終戦を行った。しかし、結局青豆は自殺によって再生し、家庭のなかに回収された。今までの村上春樹作品のなかの女性登場人物と違った色彩を持ったヒロインの「消失」は村上春樹の他者視点の不徹底の表れとしか言えないだろう。

第五章で『1Q84』に登場したふかえりという美少女ふかえりを中心に論じていきたい。サブカルチャーを連想できるふかえりは『1Q84』において性的描写や身体描写が不自然に多いものとなっている。ふかえりは実に父に性的被害を受けたが、意識的に復讐することなく、作品中では「母」や「愛と理解をもたらす」役割を果たしていただけだった。ふかえりの身から、村上春樹の女性を非リアリティに性的相手にする傾向が強く見られる。

第六章で『1Q84』に登場した老婦人という登場人物を中心に論じた。村上春樹は若者を主な読者に想定して、若者を中心に作品を創作してきたと言えるが、『1Q84』の中に、脇役ではあるが、重要な老女像を作り上げた。この老婦人はリーダーとして反家庭内暴力と戦った。現代システムから自由な居場所に移動し、規範的な女性のアイデンティティから解放された老女のように意味づけられた。しかし、反カルトをテーマにする村上春樹は結局老婦人の精神をカルト的に描き、「消失」させた。老婦人の消失から善と悪の境目を曖昧化しすぎた村上春樹の精神がうかがえるだろう。

以上の検討によって村上春樹における他者表象には様々な問題が内包されていることが

指摘できるが、中国、女性という他者表象において現代の問題をテキスト内に先鋭に取り込み、新たな他者性の表現空間を創り出していることは疑いようがない。

グローバル時代において、村上春樹を読むことによって移動や変動する人たちが言葉の境界を越えて共通するイデオロギーを持ち始め、結局は自己と他者の輪郭が緩め共通するアイデンティティを共有できるに至ることも少なくないだろう。ここに村上春樹の意義があり、読まれる理由でもあるだろう。